

87 《ロザリオの聖母》と《聖マタイの召命》

聖母の右手と髭男の左手の比較

2024（改訂版）

真鍋友範

- 1 どちらも、単純な【第三者への指差し動作ではない】。



《ロザリオの聖母》



《聖マタイの召命》

* 双方ともに、親指と人差し指の廉造動作なのだ。

カラヴァッジョは、単純に指差し動作を描くことは少ない画家だ。例えば、【ロザリオの聖母の右手は、単純な指さし動作ではない】。

聖母の右手の意味は、まず親指を幼子イエスに向けた後、人差し指を聖ドメニコ僧と教徒たちに向け、『イエスの教えを、あなた（聖ドメニコ僧）が教徒たち伝え、導きなさい』、という意味だ。

《聖マタイの召命》での髭男の左手も、親指を見落せば、単純な指差し動作に見えてしまうが、事実はそのではない。【二段階の連続質問動作を再現している。】

『お探しの人は、私ですか、それとも隣の眼鏡の人ですか』の意味なのだ。

二段階の連続動作を読み取れば、それが質問動作であることが理解され、次にイエスはどのような回答動作を行ったのかを読み取る必要が生じるのだ。



《聖マタイの召命》

よく見ると、イエスの回答動作は【三段階の複雑な回答動作】だ。ここまで読み取れて、初めてイエスが誰を呼び出しているのか、を発見できる。

身体動作を一部しか読み取らない、ローマ・カトリック説や、ドイツ・アマチュア研究者・ドイツ学派美術史家説は、全て【誤った解説】なのだ。

《マタイ論争》はあるのか、と問われれば、確かに、誤った解釈の二つのグループによる論争はあるのだろう。

つまり、現実問題として、【マタイ論争は無意味だ。】

両者とも決定的な判断の究極勝利には、絶対に到達できない。

ローマ・カトリック教会に対して、身体動作の解析に基づく科学的視点が必要だと訴えても、宗教団体が科学的視点を受け入れるか否かは微妙だ。宗教的ベールに包まれた精神世界に住まわれている宗教家に対して、進化論は無意味なのと同様だからだ。

一方のドイツ学派は、より位置的には宗教的ベールの視点から逃れているものの、論理が主観的でありすぎて、真実追及への科学的アプローチの姿勢に欠けている。観念的判断に終始した自己満足的論考だ。これでは真実に到達できないのだ。

更に悪いのは、既存主張を絶対に譲らない。修正もない。過ちだと認めない両派の保身姿勢だろう。

【カラヴァッジョの描いた全ての身体動作】を、謙虚に正確に読み取り追求することで、初めて描画内容の真実は語りかけてくるのだ。

《ロザリオの聖母》の右手は、単純な指さし動作ではなく、豊かな内容のストーリーが描き込められているのだ。

この人差し指と親指の連続動作は、合わせて、我々鑑賞者が読み取らなくてはならない重要な聖母のメッセージなのだ。